

ひとつの霊に結ばれる
ービルマのカレン族の教会でー

奨励	原 誠〔はら・まこと〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター所長 同志社大学神学部教授
研究テーマ	日本とアジアのプロテスタント教会の歴史

実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

(エフェソの信徒への手紙 2章14―22節)

新島永眠の日

今日は同志社の創立者新島襄が亡くなって、123年たった日であります。新島が亡くなったのが1890年の1月23日でしたので、今年は1、2、3という数字が二つ重なりました。今朝は、創立者永眠の日として、早天祈祷会が若王子山頂の同志社墓地で行われました。

新島は、46歳11カ月で生涯を終えました。同志社での在職期間は16年に過ぎません。私は、同志社で働き始めて16年をはるかに越えてしまいました。創立後16年、その短い期間に新島がどれほど大きな仕事をし、学生、教員たちに大きな深い影響を与えたのかということをつつも思いながら、私の同志社在職中のことを重ねて考えてしまいます。今日は、新島の召天記念ということを見た奨励を、とも考えたのですが、今年度秋学期最後のチャペル・アワーということもありますので、統一テーマ、「互いに重荷を担いなさい」ということを念頭におきながら奨励することにしたしました。

二つのものが一つに

秋学期の間、それぞれの奨励者の方々によってこのテーマが語られてまいりました。最初に読んでいただいた聖書の箇所を改めてふまえておきたいと思います。この聖書のテキストはキリスト教の根本的な教えが記されているところです。「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました」(14―15節より)。これがキリスト教のメッセージであります。キリストは平和であり、二つを一つにする。このメッセージを秋学期の統一テーマ「互いに重荷を担う」これと併せて考えてみたいと思います。私たちは、自分の人生をそれぞれ生きています。自分の人生だけでも重い、自分の将来のことや年齢を考えたならなお不安です。そんななかで、自分の生涯がどのように終わっていくのだろうか、ということも考えていきますと、自分の人生のことだけでもしんどい、まして他人のことなんか二の次ということになり、自分のこと以外には無関心になってしまうのが一般的な考え方です。

まもなく大学では入学試験が始まります。このときなどはその一番典型的な形が現れると思います。入学の定員の枠がありますから、自分の親しい友人、これはライバルになります。自分さえ受ければよい、ライバル、親しい友人を蹴倒してでも受かりたい、というのが今の社会のなかでの本音の生き方でありましょう。いざというときに、重荷を負いあえるかという問いは抽象的すぎる、理想論にすぎないというふうなことを言われるかもしれません。それが現実なのかかもしれません。しかし、聖書の教えは全く違う角度で話を説いています。他者と共に生きること、他者と共に生きていく世界、これがどんなに幸いなことであるかということを聖書は伝えています。そのためには自分の事、そして他者の事、そしてそれに対して関心をもつ。課題を分かち合う。命を分かち合う世界が、どんなに大きいことなのかということを聖書は教えています。二つのものが一つになる。神は私たち人との関係の真ん中に、イエス・キリストという存在をつくれ、和解、ゆるしという出来事とおして、平和を示される。イエス・キリストという存在によって、神と私たちは一体となって生きていけるということを示します。

二つのものが一つになるというのは、このような意味です。「キリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです」(18節より)。

一つの霊というのは、一つの力、一つの希望、一つの同じ思い、同じ命のなかで、というように翻訳したほうが、今の私たちには分かりやすいと思います。キリストによって、わたしたち人間同士が、一つの力、一つの希望のなかで生きていける、この世にありながら、今日の聖書箇所にもありますように、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属するもの、神の家族なのです。まずイエス・キリストが自分の人生のこの重さ、不明さ、しんどさを負ってくださっている。自分の人生と一緒に歩いてくださっている。あるいは右に行くべきが、左に行くべきか、といったときに、右に行くべきだよ、と示してくれる。あるいはもうしゃみこみたくなってしまう、なげてしまいたいと思う自分を後ろから、押して、行けよ、前に一歩進もうよと、イエスが一緒に人生を歩いてくださっているという信仰のゆえに、私たちは一緒に生きていける、ということなのです。ルカによる福音書にはこういう言葉があります。「あなたたち律法の専門家も不幸だ。人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしないからだ」(11章46節より)。律法の専門家とは、今の時代では、私たち教師のことです。とりわけ宗教の教師の事です。私に言われていることだと思います。口では偉そうに綺麗事を言いながら、自分では指一本動かさない。ということをイエスは批判されています。また、マタイによる福音書では「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの輶(くびき)を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの輶は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(11章28―30節)。イエスとの出会いが私たちに新しい人生を見せてくれる。

ビルマのクリスチャン

このことについて私はこれまでの自分の人生や学びのなかで、具体的に関わった人や事柄がたくさんあるのですが、そのなかの一つをご紹介します。それが今日のサブタイトルに出てくる、「ビルマのカレン族の教会」のことです。ビルマというと何を連想されますか。

『ビルマの豎琴』という小説や映画を見たことがある、あるいはもう少し興味と関心をもっている人は、アウンサンスーチーというノーベル平和賞をもらった人がいるというような方が多いと思います。ビルマは現在、ミャンマーという国名になっていますが、私はあえてビルマと一貫して呼んでいます。国際情勢などについて新聞など丹念にキャッチしておられる方は、ご存じだと思います。カチン族という部族がいるのですが、このカチン族に対して、政府軍がずっと攻撃を続けており、やっと最近、停戦の方向にむかってきたことも報道されています。

ビルマの国民は、約60%がビルマ族、約40%がカレン族・カチン族・シャン族・チン族・ラフ族などの周辺の山岳民族です。ビルマは、第二次世界大戦後、1948年にイギリス連邦から独立しました。皆さんはご存じないかもしれませんが、ビルマという国の、約6割のビルマ族の中には、クリスチャンはほとんどいません。いるとしたら非常に珍しい。しかし、4割の山岳民族の中では、クリスチャンがものすごく多いのです。民族の約40%くらいです。ですから、ビルマの国全体ではクリスチャンの数が8%くらいになります。日本が約1%と示したら、日本よりもクリスチャンの数が多くことに気がつきます。私は、ビルマを6、7回訪ねたことがあります。ビルマに神学校がありますが、その神学校を訪ねたときに、「この神学校は、どの学位まで取ることができますか」と尋ねてみました。同志社大学の神学研究科は、バチエラー(学士)、マスター(修士)、ドクター(博士)三つの課程を取ることができます。すると、ビルマ神学校の方が「ドクターまで取れます」と誇らしげに言われました。しかし、神学校の図書館を見学させてもらいましたら、私の研究室の本棚よりも蔵書が少ない。そういう水準での博士課程であるのがわかり、驚きました。そこで私は、他の先生にも選定をお願いして、非常にベーシックでスタンダードな英語の本、聖書学の基本、組織神学の基本というような本を約200冊、チャリティーの一環として税関で承認を受け、贈呈しました。このような仕事をビルマの神学校にさせていただく経験をすることができました。

ビルマのカレン族の教会についてご紹介します。2003年度の一年間、私は、在外研究の機会をいただいてタイのバンコクに住んでいました。2004年の正月をビルマの首都ラングーン(ヤンゴン)から西に200km先のパセインという町で迎えました。それは、ビルマのミャンマー・カレン・バプテスト・コンベンションという特別な集会に出席するためです。特別な集会というのはどうのことかと申しますと、2004年はビルマに住むカレン族の中で、最初に洗礼を受け、クリスチャン第一号になったコー・タービューという人物の生誕175年記念の年、カレン語の聖書が翻訳出版されて150年の記念の年であることから、招待され、私も混ぜてもらったというわけです。ビルマのカレン族のクリスチャンの方がタイのカレン族のクリスチャンを招待していて、私はタイのカレン族の方々とも非常に親しかつたので、誘っていただき、ビルマのカレン族の教会を訪ねたわけです。

そのカレン族の該当する17教区には1300の教会があり、約37万3000人の信徒がいます。年に一度そのカレン族の教会の人たちが、集まり、とても盛大な大会を開催します。メイン会場になる学校の校庭に太い竹を用い、シートで覆った巨大な仮設テントがつくれ、大きなステージと音響設備、約3万人分のプラスチック製の椅子が用意されています。会場近くはまるで緑日のように、屋台もたくさん出ています。2003年12月31日の夕方から、ブラスバンドとダンスのオープニング。18時から開会礼拝があり、夕食後の20時頃から、各教区対抗の男声合唱、女声合唱、混声合唱大会やダンス、神学生聖歌隊の合唱。こうして新年を迎えました。朝の礼拝、日中の議事、タバの礼拝のあとの21時からは教区対抗のコン

テストが催され、大賑わいの一週間を過ごすわけです。見てみると、それぞれの教区は、メンバーを集め、練習し、何とか優勝しようと懸命に努力してきたことがよくわかります。年に一度のカレン族の民族としてのアイデンティティ、そしてクリスチャンとしての連帯を確認するための重要なお祭りです。

私の挨拶

オープニングセレモニーの開会礼拝のとき、私は日本からの海外のお客さんとして紹介され、挨拶を求められました。生まれて初めて、3万人の前で挨拶をしました。そのような機会は、生涯二度とないのではないかと思います。私は以下のように述べました。「カレンのクリスチャンのみなさんにとって、重要な会議に出席することができて感謝しています。私の父は今も生きていますが、牧師でした。神学校を卒業し、短期間日本の九州の教会の牧師として働いた後、日本軍は彼を徴兵して彼は日本陸軍の兵士となりました。そしてあなたの国、ビルマに派遣され、多くの日本兵とともにビルマで戦いました。彼は戦争が終わった後無事に日本に戻り、また牧師として働き始め、結婚してそして私が生まれました。私は父の姿、父の生涯から多くのことを学びました。また、歴史を学びました。そして戦争では、多くの日本兵のみならず、実に多くのビルマの人びと、そしてカレンの人びとが、その時代に殺されたことを知っています。ですから私は一人の日本人として、日本人のクリスチャンとして、日本の牧師として、また日本の神学校の教師の一人として皆様に心からの謝罪をいたします」。その開会礼拝の終わった後、多くの人びとから握手を求められました。

歴史をわかちあう

歴史を振り返ってみると、イギリス植民地時代のビルマには、最大多数としてのビルマ族のほかに多くの少数民族がいるなかで、イギリスからさまざまな恩恵を受けていると考えた親英派と、イギリスからの独立を目指していた反英派がいました。そして戦争により日本軍侵攻後には同様に親日派と反日派もいたわけです。当時ビルマはイギリスの植民地だったわけですから、イギリスと一緒に戦いたいと思った人たちもいれば、そうでない人たちもいました。アウンサンスーチーの父のアウンサンは、イギリスに批判的で反イギリス運動を組織して、それを日本軍が利用して、支援していた人たちもいたのです。同じように少数山岳民族の中でもイギリス派にたつて反日運動をずっと続けてゲリラ戦争をやったグループもあれば、日本軍に協力したグループもある。キリスト教徒の多かったカレン・カチン・チン族の人びとは、日本軍による統治の時代には親英派とみなされ、多くの村が破壊され、住民が殺されました。戦争が終わった後も、非常に厳しい混乱が続きます。ビルマの独立以後は、ビルマの独立を維持しようとする立場と、他方ビルマからの分離独立を求めて戦い続ける、というように歴史の中で、民族ごとの立場、あるいは仏教、アニミズム、キリスト教というように、宗教によっても、また集落によってもそれは均一ではなく多くの要素が複雑に絡み合ってきました。

そのようなビルマの政治と宗教という複雑な絡みのなかで、私はビルマの人びとに挨拶をすることができ、一週間過ごすことができた。それは、私の生涯のなかでも、かけがえのない経験のうちの一つと言えます。このようなことは、特に歴史に関心をもたなければ多分知り得ないことでしょう。しかし、大学で学んでいる私たちにとって問題意識の持ち方を変えれば、ものの考え方にかなり奥行きが深さと広がりをもつと思うのです。ビルマに住む人びと、今日の話では、カレン族、その他の少数民族の人びとと私たちの間でどのような歴史的な関係があり、どのようなかたちで和解ができ、共に生きていくことができ、命を味わい、感謝しながらこの世の生涯を歩んでいけるか、お互いに重荷を負いあうことについて、今私たちが学びの最中にあるときに深く心にきざみたいのです。

一つになることを求めて

同じ心、同じ力、同じ希望、同じ喜び、そして同じ悲しみ、これを分かち合いながら生きていくこと、この事は逆に言えば、聖書に書かれているように国籍があり、民族の文化や伝統があり、規則や戒律、そして経済力、軍事力、そのようなことから逃げるわけにはいかない状況のなかにありながら、重荷を負いあうこと、敵意と言う隔ての壁をとりこわし、平和を実現することにあらためて私たちは関心をもちながら、今の学びのときをそしてこれからの人生を考えていきたいと思うのです。

2013年1月23日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録